

れきみん

資料館だより

No. Ⅲ-4

相生市立歴史民俗資料館

〈資料紹介3〉塚森古墳－帆立貝形前方後円墳の復元－

那波野3丁目の平地に直径約40m、高さ約6mの円丘があり、塚森古墳と呼ばれています。よく観察すると、墳丘の裾の部分は崖状の急斜面になっているので、耕作により周囲が削られているのは明らかです。また、基底部から約2mあたりは傾斜が緩やかで、幅1m前後のテラス状をなしているので、墳丘は2段築成と考えられます。



塚森古墳(南から)

1980年代に、塚森古墳が帆立貝形前方後円墳(前方部が短い前方後円墳)であることが提起され、周濠や墳丘の復元試案が示されるようになりました(上田1985、岸本1985)。また、『相生市史』の編纂に関わって墳丘と周辺部の測量調査が行われ、その成果は第5巻にまとめられました(西谷1989)。

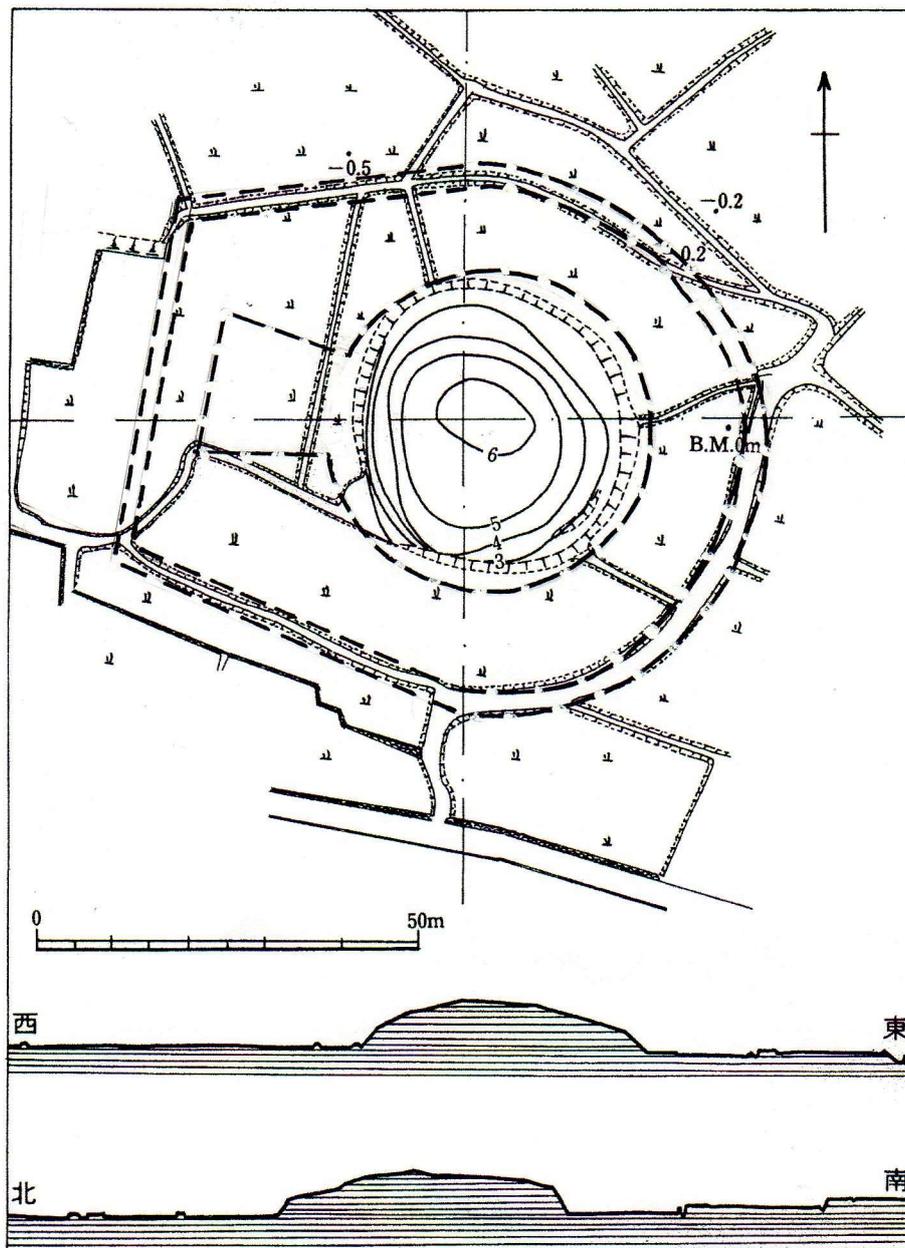
市史に掲載された測量図の畦や溝からは、馬蹄形の濠跡を読み取ることができます。市史には、1890年(明治23)の山陽鉄道(現JR山陽本線)敷設工事の際、高まりを削って土を運んだと伝えられていることも記されています。

ここで、市史掲載測量図をもとに墳丘と周濠の平面を復元してみましよう(裏面)。濠の痕跡は、南東から南にかけて明瞭です。また、北側の畦からも一定の痕跡が確認できます。南北の濠幅が同じであると仮定すると、これら周濠の痕跡から、後円部の削られている裾がある程度復元でき、後円部径が約43m、後円部をめぐる濠幅が11～12mと推定することができます。

濠の西端と前方部端を復元するのは容易ではありませんが、現在残っている南側濠跡の西端を基点にして考えれば、濠と周堤(濠を囲む土手)を含めた全長が約80m、南北間の最大幅が約70mになります。前方部の南角が濠跡内に位置する可能性は低いことから、墳長約60m、前方部長約16m、前方部前面幅約18mとするのが妥当です。くびれ部の幅は推定不可能であり、前方部の形状は確かなものとはいえません。

なお、濠がさらに西に延びる可能性を否定するものではありません。その場合、前方部前面の濠幅を後円部の周囲と同じ11～12mと仮定すると、濠・周堤を含めた全長は約90mに達します。

いずれにしても、塚森古墳は相生市域最大規模の古墳といえます。築かれた時期は、採集された円筒埴輪片などから、5世紀末ごろと考えられています。ここで示した復元試案の成否については発掘調査を待つほかなく、将来の調査・研究に期待したいと思えます。



塚森古墳 墳丘実測図 (縮尺約1000分の1)

* 西谷 1989 をもとに復元試案を破線で示す (下段は断面図)

〈参考文献・図出展〉

上田哲也 1985 「兵庫に於ける周濠を備える前方後円墳の変遷」『兵庫史の研究』(松岡秀夫傘寿記念論文集刊行会)

西谷真治 1989 「塚森古墳」『相生市史』第5巻(相生市・相生市教育委員会)

岸本道昭 1985 「西播地域の首長墓とその動向」『兵庫史の研究』(松岡秀夫傘寿記念論文集刊行会)

岸本道昭 2001 「前方後円墳からみた政治構造」『前方後円墳からみた播磨』集会の記録(第1回播磨考古学研究集会実行委員会)

岸本道昭 2013 『古墳が語る播磨』(神戸新聞総合出版センター)

(中濱久喜)